

福島県の森林等の自然環境を活かした アクティビティの体験と普及促進への取組

Sakura no Seibo Junior College
桜の聖母短期大学 **BACK TO THE NATURE** プロジェクト

プロジェクトの背景と目的

幼児教育の基本と子どもの自然体験の重要性

- ✓ 遊びを通して、主体的に環境に関わることでより豊かな感性、好奇心や探究心を培う
- ✓ 幼児期の発達を促す環境としての「自然」の持つ多様性・応答性・循環性

日本の保育における自然環境とのかかわり

- ✓ 領域「環境」においては直接に自然と触れて遊ぶことを通じての学びの大切さが強調
- ✓ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では「自然との関わり・生命尊重」が明示

自然環境を活用できる保育者としての資質向上

保育者養成課程の問題提起

- ✓ 学生の体験不足による自然とのかかわりを援助できる保育者像との隔たり（井上, 2008）
- ✓ 子ども時代の自然体験が、保育者として子どもとの関わりに自然体験を取り入れることに影響を及ぼしている（大橋, 2009）

近年の自然環境を活かした保育への注目

- ✓ 自然環境や地域資源を活用し、子どもの直接体験を大切にする「自然保育」
- ✓ 子どもの「生きる力」を育むのに適した環境である（国土緑化推進機構, 2018）

プロジェクトの背景と目的

福島県の森林等の自然環境を活かした アクティビティの体験と普及促進への取組

① 「ネイチャーゲームリーダー養成講座」の受講と指導者資格の取得

福島県の自然環境、森林を活かした遊び方や外遊の手法、野外活動における安全管理の知識と考え方が学べる当該講座を受講、指導者資格の取得

② 幼児を対象とした自然体験プログラムの指導実践

福島県主催「子どもと青年の異世代交流事業」等において、子どもやその保護者を対象に自然体験プログラムの指導実践

- ✓ 子ども、若者の森林や自然環境への関心の向上
- ✓ 保育現場における森林や自然環境への理解や利活用

対象地域と活動計画

- ✓ 対象地域：福島県北部
- ✓ 活動計画

6月 大学周辺フィールドにおける自然環境の把握
6月～12月（計7回）

福島県主催「子どもと青年の異世代交流事業」にて、
親子向け自然体験イベントの企画・運営の実践

7月～8月

「ネイチャーゲームリーダー養成講座」開催概要決定、講師との連絡調整

10月 「ネイチャーゲームリーダー養成講座」実施、指導者資格取得

- ✓ 情報発信

桜の聖母短期大学公式ホームページとSNS等にて活動内容を発信



活動内容報告

- ✓ 大学周辺フィールドにおける自然環境の把握



- ✓ 指導教員のもと、大学と信夫山（福島市）にて、身近な自然を活用したアクティビティ「フィールドビンゴ」「めだまっちをさがせ」を体験した。
- ✓ 「五感を使う自然体験」を通して、子どもたちと体験する際の楽しみ方や注意点を学ぶことができた。
- ✓ 体験を通じて、身近な自然に対する気づきを得ることができた。

活動内容報告

- ✓ 福島県主催「子どもと青年の異世代交流事業」



- ✓ フォレストパークあだたら（大玉村）にて、福島県「子どもと青年の異世代交流事業」に参加。6回のフィールドワークとワークショップを通じて、子どもにとっての自然遊びの大切さや活動のノウハウを体験的に学んだ。
- ✓ 12月には学生実行委員会にて親子イベントの企画運営を行い、親子30組105名を動員。広く森林への関心、自然体験活動の普及促進への取組を行うことができた。

活動内容報告

- ✓ 福島県主催「子どもと青年の異世代交流事業」



- ✓ フォレストパークあだたら（大玉村）にて、福島県「子どもと青年の異世代交流事業」の一環として、自然あそび事業「森のようちえん」にスタッフとして参加。
- ✓ 時季に応じた自然体験活動を幼児とその保護者とともに体験（計4回）し、子どもへ自然体験を通して、興味・関心を持たせる、深める、広げる、強めるなどの支援について学ぶことができた。

活動内容報告

- ✓ ネイチャーゲームリーダー養成講座



- ✓ 大学と信夫山（福島市）にて、自然への関心や驚き、不思議、驚きを感じ「自然に目を向け自分も自然の一部であることに気づく」体験型の講習会「ネイチャーゲームリーダー養成講座」を実施。指導者資格「ネイチャーゲームリーダー」を取得。
- ✓ 保育現場でネイチャーゲームを取り入れる際のポイントや効果を学び、楽しみながら自然への感性を高め、仲間と分かち合うことができた。

プロジェクトのまとめ

- 「自然保育」における保育者の役割として、「見守る」「分かち合う」「待つ」ことの重要性を学んだ。
- 自然に生きる保育者の姿を、子どもが間近で感じられる環境を構成していくことが今後の課題である。



子どもが自然の中で自ら環境に働きかけ、主体的に行動する機会を保障することができる